

# 論文要約

## 論文題目

中国語複合語における日本語借用語からの語構成上の影響

## 申請者

李 瑶

## 論文要約

本論文は、中国語における日本語からの借用語（日本語借用語）の影響について論ずるものである。周知のように、19世紀末期から20世紀初頭にかけて、大量の日本語語彙が中国語に借用された。この現象について、20世紀初頭から研究が始まり、1950年代以降、盛んに行われている。特に、西洋からの新概念の導入及びそれにより生じた日中間の語彙借用に着目した「近代日中語彙の交流」に関する研究は、著しい成果を挙げている。しかし、多くの先行研究では借用語の語源及び借用ルートについての議論を積み重ねてきたものの、日本語が中国語の語彙体系における造語方法・語構成構造に与えた影響については、十分に研究されているとは言いがたい。以上のような状況を踏まえて、本論文は、「中国語複合語における日本語借用語からの影響」に着目し、その解明を目論むものである。

本論文が「中国語複合語における日本語借用語からの影響」に着目する理由について説明しておく。まず中国語語彙のうち「複合語」に限定したのは、現代中国語において、一つの形態素から構成される単純語においては、基本的には日本語からの影響はほとんど確認されないからである。さらに二つ以上の形態素から構成される複合語は語彙数が多く、現代中国語の語彙体系において重要な位置を占めているとも言えることも理由の一つである。

また本論文における「日本語借用語」とは、端的に言えば、「日本語由来の言葉」を意味する。中国語の体系においては、日本語借用語は外来語の下位分類の一つでしかないが、他の外来語に比べ、特殊性が顕著である。具体的には、日本語借用語はおおよそ次の四種類からきたと考えられる。

- ①日本で作られた音訳語：瓦斯、倶楽部、浪漫
- ②和語：取締、組合、立場
- ③和製漢語：哲学、電話、象徴
- ④中国語由来の漢語に近代的な欧米概念を付与した訳語：経済、文化、革命

それぞれの種類の語彙数を見ると、①②に由来する語は少数であって、③④から借用したものが日本語借用語の大部分を占めている。このことから、中国語が借用したのは、主に日本近代に生成された或いは新たに意味を付与された漢語であるということがわかる。また、日本の訳語の借用に加えて、音声の借用を伴わないという性質が、日本語借用語の有する特

殊性だと言えよう。

従来の中国語における外来語の定義、即ち「音訳借用語＝外来語」という基準によれば、日本語由来の語彙のほとんどは外来語から外さなければならぬことになる。特に、上述の分類のうち、④からの語彙を借用語とみなし得るかどうか、論点となっている。しかし、日本語借用語が、中国語内部において発生・発展してきた語ではなく、外国語を基に直接中国語へと意識された語でもない。漢字という同じ文字を用いてはいるが、言語システムの全く異なる言語間におこる語彙の移動現象であり、語形や意味の出自が日本語であることを考えれば、日本語借用語は中国語における外来語の内部における一種の独特なカテゴリーであるとみなすべきだと考える。

以上のような考えを踏まえて、本論文では、語形と意味の二点において、日本語からきたと判断できる語を「日本語借用語」と呼ぶ。そのうち、多数を占める、特殊性と複雑さをもつ上述の分類の③④、いわゆる和製漢語と中国語由来の漢語に近代的な欧米概念を付与した訳語とが、本論文の主な研究対象になる。

## 1 先行研究

日本語借用語は日中両言語にかかわるものである。中国語側からみて、ある語が日本語から来たかどうかという来源を確認すること、そして日本語借用語だと確認された場合にその語の受容の歴史を明らかにすることは、借用語を研究する多くの学者の主要な目的である。一方、借用元の日本漢語の語源をさかのぼっていくと、日本語側の明治期の新漢語や江戸期の蘭学の訳語とかかわっていることもあり、日本語における訳語がどのように造られ、中国語および西洋宣教師の造語と如何なる関わりをもっているか、そして新漢語が近代日本語においてどのように位置づけられたかという問題は、主に日本語研究者が関心をもって深く研究してきたと言える。

個々の語の語源の判明及び借用ルートについては、中国語側において王立達（1958）、高名凱・劉正焱（1958）、Federico Masini（1993）、さねとうけいしゅう（1960）など、日本語側において山田孝雄（1940）、森岡健二（1969）、沈国威（1994）、杉本つとむ（1998）、野村雅昭（1978）（1988）（1999）（2012）、荒川清秀（2002）（2018）、朱京偉（2013）、陳力衛（2019）など重要な論考がある。

各分野の専門用語については、荒川清秀（1997）が日中で共通して使われている地理学用語を、朱京偉（2003）が近代哲学用語、音楽用語、植物学用語の成立、受容と定着を考察しており、蘇小楠（2003）は化学用語を中心に、近代日本語の成立が近代中国語の成立に与えた影響の分析を試みている。

また、借用された日本語が中国語の語彙体系や造語方法・語構成構造に何らかの影響を与えたかどうかについての研究も存在するが、数は相対的に少ない。そのうち、北京師範学院中文系漢語教研室（1959）、大原信一（1974）、沈国威（1990）、陳力衛（2001）（2019）など

重要なものがあつた。

## 2 問題提起

日本語借用語に関する先行研究の成果を踏まえた上で、本論文には、以下の三点の問題提起を行う。

1、日本語借用語であるとみなし得る語彙について体系的に整理することが必要だと考える。従来の研究でも一部の語彙について考察されることはあつたが、体系的に考察することは行われていない。一方、借用元の日本漢語についての語誌研究は日本において盛んであり、『講座日本語の語彙 語誌 I』『講座日本語の語彙 語誌 II』『講座日本語の語彙 語誌 III』、『明治のことば辞典』、『日本国語大辞典』（第二版）など着実に成果が上がっている。これらの研究成果を踏まえて、中国語における日本語借用語の数や、それらの語が借用された過程を明らかにする必要があると考える。

2、日本語借用語が中国語として定着した後、中国語の語彙・形態素の意味にどのような影響を与えたかを検討すべきだと考える。語彙体系から見れば、語の借用語に伴い、新しい概念を意味する新しい単語が増加したことはよく指摘されているが、その語を構成する形態素に対する影響が問題にされることは多くない。中国語に借用された日本語借用語は日本漢語であつて、その形態素は漢字で表記されるが、両言語間で意味が異なることがあり、同じ漢字で表記されてはいるものの、形態素の意味が異なることがある。

3、日本語借用語が普遍化することにより、中国語の語構成など文法レベルでの影響があつた可能性がある。この点を指摘している先行研究も皆無ではないが、この問題を本格的に論じているものは少ない。日本語借用語から中国語の文法レベルの現象に対してどのような影響を与えたのかというメカニズムを明らかにすることが必要だと考える。

以上の問題意識をもとに、中国語語彙の大部分を占める複合語について、日本語借用語からの影響、とりわけ語構成上の影響を検討することとしたい。

## 3 本論文の構成と主な内容

本論文は「本論」と「附論」により構成される。「本論」は六章から成り、中国語複合語における日本語借用語からの影響について論じている。「附論」は中国語複合語における日本語借用語の一覧と、中国語複合語における西洋宣教師により造語された語彙の一覧である。

第1章では、本論文の導入として、研究範囲を明らかにし、研究対象である「日本語借用語」の定義を説明したのち、日本語借用語についての先行研究をまとめ、本論文の目的を明らかにしている。なお、ある漢字で表記された語彙が「日本語借用語」であることは自明ではないため、当該の語彙が日本語借用語であるかどうかを認定するためには、文献的調査が

必要になる。そのような文献には、一般的な中国古典のみならず、西洋宣教師による漢訳洋書なども含まれるため、この章では一般的な中国古典以外の資料について体系的な紹介も行うこととし、そのような資料を①漢訳洋書、②清末中国人による世界事情・地理に関する文献、③蘭学資料・英学資料という三つのカテゴリーに分けつつ紹介している。

第2章では、その語彙の数量、使用分野・使用頻度などの点から、日本語借用語が、中国語の体系のなかで重要な位置を占めていることを確認した上で、19世紀末期から20世紀初頭にかけての時期に中国語複合語が大量に増加した現象について、以下の二つの点に着目しつつ分析を行った。第一点は、中国語複合語の大部分が書面語ということである。中国語複合語の歴史においては、複合語が急増した時期は二度あり、どちらも大規模な外国語翻訳を行った時期であること、また二度の急増時期における造語方法に類似性がみられることから、外国語の影響こそが中国語複合語の増加をもたらした非常に重要な原因であると考えた。第二点は、日本漢語の特徴を分析すれば、二字漢語が日本漢語の中核を占めていることが確認できるということである。中国語は清末民初に、日本語から大量の語を借用したが、借用したのは主として明治初期の漢語であった。明治初期の漢語とはいえ、明治初期に新たに造語されたものだけではなく、一部は、漢籍における漢語を利用し新たに意味を付与した漢語であって、一部は蘭書の訳語から継承してきたものである。いずれにしても、これらの漢語の大部分は二字漢語であった。以上の二つの点に着目した分析を踏まえて、19世紀末期から20世紀初頭にかけての時期に、中国語複合語が大量に増加した現象について、日本語借用語が重要な役割を果たしたという主張を行った。

その他、日本語借用語はなぜ中国語の体系内のフレーズから一語化したものと見なされやすいのかということ、視点を変えて言えば、中国語において日本語借用語が受容されやすい原因について検討を加えた。日本語借用語は、日本語の体系内において漢文訓読や欧米概念の翻訳の際に「一語」として再解釈されたり（「一語化の代行」）、既存の中国語語彙に新たな意味が付与されたりした後に、中国語の仲間入りをしたのである。それは、いわば中国語の内部において生成されたと「偽装」された複合語であり、それが原因で外国語と認識されにくくなっており、容易に受容されて素早く定着した結果、中国語複合語の一員として常用されるようになったのである。

第3章では、形態素や文法の面における日本語借用語の中国語複合語に対する影響を検討した。二字語は二つの形態素から構成されるので、日本語借用語が定着したことにより、各形態素の意味も新たに確立される。しかし、日中両言語における漢語形態素の意味の違いによって、中国語に既に存在しているある漢字で表記する形態素において、日本語借用語の普及に伴って異なる意味変化が生じたり、新しい意味が増加したりするようになった。さらに、中国語の非述形容詞を例として、形態素の文法機能が選択的に借用されることにより、日本語借用語の文法機能が制限されるようになったと分析した。

第4章では、本来はその外部に目的語を伴うことができないVO型動詞が、なぜ清末民初に外部目的語を伴うことができるようになったのかという点に着目し、中国語動詞の文法

機能の変化と日本語借用語との関係を検討した。VO 型動詞が目的語を伴うことができる原因を探究するために、現代中国語における VO 型動詞を調査し、その中の目的語を伴うことができる VO 型動詞の数と比率を算出し、その目的語の意味類型を分類した。そのうえで、出現時期・文献における分布などから日本語借用語だと疑われる動詞を考察対象にし、実際の用例における意味・文法機能を考察した。最後に、中国語の VO 型動詞が目的語を伴うようになったことと、日本語借用語との関係を明らかにし、日本語借用語が如何に中国語文法機能に影響を与えたかということに関する一つのモデルを提示した。

その影響のメカニズムは、日本語借用語としての VO 型動詞は、語形変化なく借用したものと日本語動詞の文法機能の借用を通じて、中国語における伝統的な VO 型動詞の文法機能とは異なるものになり、またこれらの日本語借用語の普及や定着に伴って、中国語における一部の VO 型動詞が表面的には何も変わらず新しい意味や文法機能を備えるようになったのだと考えた。

段階を分けて説明すると、これらの語の意味や文法機能は以下のような変化過程を経てきたのだと考えられる。第一段階は、清代以前の状態である。これらの VO 型動詞は、清代以前の中国語に当該の形態素の複合形式が存在していたものの、その意味は同形の日本語が借用された後の意味と異なっていた。この段階では、当該の形態素の複合形式が存在していたとしても、これらは統語面での VO 構造のフレーズであったため、外部に目的語を伴うことができなかった。第二段階は、日本語において、日本製の新たな漢語として使われたか、或いは借用により日本漢語となった状態である。このとき、第一段階では VO 構造のフレーズであったものが、日本漢語になったため意味が変化し、活用語尾がついて他動詞として使用され、「ヲ」格で対象をとるようになった。このことにより一語とみなされるようになり、VO 構造という本来の内部構造に対する意識が希薄化した。第三段階は、中国語に借用または再流入された後の状態である。中国語の複合語となっても、意味は日本語において獲得した意味を継承し、文法機能面においても、日本漢語の他動詞としての用法に影響され、日本漢語として「ヲ」格でとる「対象」に相当するものを目的語として伴うようになった。

第 5 章では、中国語の文法体系からすると、動詞性形態素 V が直接修飾語となり名詞性形態素 N を修飾する「特殊」な修飾構造の名詞 (V>N 型名詞) を取り上げ、日本語借用語が中国語複合語の語構成に与えた影響を検討した。まず、それらの語の歴史層と構造の類型からの分類を行い、次に V>N 型名詞の生成方式を分析し、最後にその造語メカニズムに日本語借用語からの影響がみとめられることを具体的に明らかにした。

その造語メカニズムは、他動詞性であった V が日本に漢語として借用された後、①V が非述形容詞のような形態素へと再分析される、あるいは②N が接辞的名詞性形態素へと再分析される、といった変化を経て、いわば中国語に逆輸入されるというものであったと考えられる。なお、これら日本語の語構造から影響を受けた中国語語彙は、言うまでもなく現代中国語の漢字音で発音されるため、日本からの影響が容易には看取されなかったことにな

ろう。このことは、日本語から中国語語彙への影響が、口頭言語によるものではなく、「漢字を通じた語彙借用」という側面を強く持つことを示唆するものであると考える。

本論文は二字漢語の形式をとる日本語借用語が中国語複合語の語構成に与えた影響に着目して、考察を加えている。しかし大量の日本語が借用された後に中国語へ与えた文法的な影響は以上のことに止まるものではなく、複音節助辞の形成、接尾辞の発達などの面においても、日本語借用語を通じた日本語からの影響は大きいと考えられる。また、現代中国語の文体の形成を検討する際にも、日本語からの影響を考察する必要もあろう。日本語の中国語に対する影響を意識した上で、西洋に出自しつつも日本を経由して中国語に流入するといった影響のルートを念頭に考察していけば、日中間の多くの言語的な問題をよりスムーズに解決できる可能性があるだろう。これは、今後取り組むべき課題だと考える。

最後の第6章では、本論文の各章の内容をまとめ、今後の課題について述べている。

#### 4 参考文献（本要約に出現した文献のみ示す）

- 山田孝雄（1940）『國語の中に於ける漢語の研究』實文館
- 王立達（1958）「現代漢語中従日語借来的詞彙」『中国語文』第2期
- 高名凱・劉正琰（1958）『現代漢語外来詞研究』文字改革出版社
- 北京師範学院中文系漢語教研室（1959）『五四以来漢語書面語源の変遷和發展』商務印書館
- さねとうけいしゅう（1960）『中国人日本留学史』くろしお出版
- 森岡健二（1969）『近代語の成立一語彙編一』明治書院
- 大原信一（1974）「中国語と日本語」『言語生活』3
- 野村雅昭（1978）「接辞性字音語基の性格」『国立国語研究所報告』54、秀英出版
- （1988）「二字漢語の構造」『日本語学』7-5
- （1999）「字音形態素考」『国語と国文学』76-5
- （2012）「現代日本漢語の性格」韓国日本研究団体 第1回 国際学術大会「韓日言語文化シンポジウム」予稿集
- 惣郷正明、飛田良文（1986）『明治のことば辞典』東京堂出版
- 沈国威（1990）「[V+N] 構造の二字漢語名詞について—動詞語基による装定の問題を中心に、言語交渉の視点から—」『国語学』160集
- （1994）『近代日中語彙交流史—新漢語の生成と受容』笠間書院
- Federico Masini (1993)「The formation of Modern Chinese Lexicon and its Evolution toward anational Language: The Period from 1840 to 1898」Journal of Chinese Linguistics Monograph Series No.6, Berkeley, U.S.A（中国語版：馬西尼著・黄河清譯（1997）『現代漢語詞匯的形成：十九世紀漢語外來詞研究』漢語大詞典出版社）
- 荒川清秀（1997）『近代日中学術用語の形成と伝播：地理学用語を中心に』白帝社

- (2002)「日中漢語語基の比較」『国語学』53-1
- (2018)『日本漢語の生成と交流・受容—漢語語基の意味と造語力』白帝社
- 杉本つとむ(1998)『近代日本語の成立と発展』八坂書房
- 日本国語大辞典第二版編集委員会(2000)『日本国語大辞典』(第二版)小学館
- 陳力衛(2001)『和製漢語の形成とその展開』汲古書院
- (2019)『近代知的翻訳と伝播—漢語を媒介に』三省堂
- 蘇小楠(2003)「近代日本語の成立が近代中国語に与えた影響」『日本語論究』7
- 朱京偉(2003)『近代日中新語の創出と交流：人文科学と自然科学の専門語を中心に』白帝社
- (2013)「中国語に借用された明治期の漢語—清末民初の4新聞を資料とした場合—」  
『現代日本漢語の探究』東京堂出版
- 佐藤喜代治(1983)『講座日本語の語彙第9巻 語誌I』明治書院
- (1983)『講座日本語の語彙第10巻 語誌II』明治書院
- (1983)『講座日本語の語彙第11巻 語誌III』明治書院